熊本日日新聞　平成24年（2012年）3月9日　金曜日
（第3種郵便物認可）

してプールしていた可能性があることが8日と取引のある信託銀行が問題の発覚後、AI口座を調べ、本来存在しないはずの残高を確

関係者によると、口座には昨年12月時点で、少なくとも数十億円程度が残されていた。

証券取引等監視委員会は、本来全額運用しなければならない資金が残っていたことを問題視。「解約する客にうその利回り分を上乗せして支払うため、新しい客のカネを流用する、自転車操業だった」（監視委幹部）とみて、出入金記録と運用の実態解明を急ぐ。

関係者によると、厚生年金基金と投資一任契約を結んだAIJが、英領ケイマン諸島に設定したファンドに預かり資産の全額を投資したとして、傘下の

がん転移促す物質解明

熊大大学院 尾池教授ら　抑制薬開発の可能性も

人体内にあるタンパク質「ANGPTL2（アンジオポエチン様タンパク質2）」が肺がん、乳がんの転移を促していることを、熊本大大学院生命科学研究部（医学系）の尾池雄一教授(46)らのグループが8日までに解明した。がん転移を抑える薬の開発などにつながる可能性がある。米がん学会誌電子版で公表した。

尾池教授らは、人の肺がん・乳がん組織と正常な組織を比較。ANGPTL2はがん組織に多く現れ、がん細胞がつくり出しているのも確認した。

尾池雄一教授

マウスを使った実験では、このタンパク質が、がん細胞に高レベルで現れると血管を新たにつくって転移しやすくなることが判明。がん細胞の動き自体を活発化させて、転移や浸潤（周囲の組織への入り込み）を促進していることも分かった。

これまでの研究で、ANGPTL2が多いと、メタボリック症候群、糖尿病などを引き起こすことも分かっている。尾池教授は「ANGPTL2の分泌や作用を抑える薬ができれば、がん転移抑制やメタボ治療につながる可能性がある。ANGPTL2の増減を調べることで、体の異変を発見する指標にもなりうる」と話している。

（田中祥三）

決定的な一つの物質発見

慶応大医学部先端医科学研究所の佐谷秀行教授の話　がん転移に関係する物質はいくつか特定されてきたが、決定的な一つの物質が見つかった。このタンパク質を標的とした治療によってがん転移を抑制できる可能性がある。